

『南山神学』42号(2019年3月) pp. 25-33.

## イエスの洗礼と祭司職の関連性を巡って

レジモン ヴァルギース

### 序論：

この論文の趣旨は、イエスの洗礼と彼のユニークな祭司職の相互関連性を簡単に紹介することである<sup>1</sup>。まず、イエスの受洗にまつわる疑問を述べたい。

### 1. 疑問点：

共観福音書は、三十歳ぐらいのイエスがヨルダン川で洗礼者ヨハネにより洗礼を受けたと述べる<sup>2</sup>。どこで、又は誰よりイエスが洗礼を受けたかはここでは問題ではない。むしろ、何故イエスが受洗しなければならなかったかが重要である。

私たちに模範を示すために、私たちに似た者になるために、イエスが受洗したと一般には説明されている。この説は司牧上、確かに有利かもしれないが、ヘブライ人への手紙 2:14-15 に反するので、神学的根拠に乏しいと言わざるを得ない。この聖書箇所は、洗礼によってではなく、受肉の神秘(神の言が人間イエスとして誕生したこと)によってイエスが私たちに似た者になったと強調する<sup>3</sup>。それに、洗礼を受けると、その受洗者はそれまでのすべての罪(原罪及びすべての自罪)が清められ<sup>4</sup>、キリストの

---

<sup>1</sup> イエスの洗礼・祭司職・キリスト者による参与は、将来より詳しく研究しようとしている課題である。

<sup>2</sup> マタイ 3:13-17; (マルコ 1:9-1; ルカ 3:21-22)。

<sup>3</sup> 「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした」。

<sup>4</sup> 『カトリック教会のカテキズム』1263項。

肢体である教会(共同体)の一員となり<sup>5</sup>, キリストの死と復活に与る者となる<sup>6</sup>。従って、私たちに模範を示すために、また私たちに似た者になるためにイエスが受洗したとする説はイエスを罪人と見なす傾向に陥る危険性があるだろう。

神の言が受肉した時に得た人性(human nature)によって、イエスは既に罪以外のすべてにおいて血と肉からなる私たち人間に似た者になっていた<sup>7</sup>。そのため、イエスは人間の弱さに同情することができた<sup>8</sup>。イエスは自分の生涯を通じて私たちに似た者になるために、類似のことを繰り返す必要がなかった。すなわち、受肉によって、罪の他すべてにおいて私たち人間に似た者になったイエスが、全く同じ目的に到達するために洗礼を受けるとは考え難いことである。イエス(神)は一回のみ誕生し、一回のみ生き、一回のみ死に、一回のみ復活し、一回のみ再臨することになっている。神は同じ出来事を二度と繰り返さない。なぜなら神と神の行いは完全だからである。むしろ、私たち人間こそ地上の旅路を通じて度々回心してイエスに似た者になれるよう努力しなければならないであろう。

では、何故イエスは洗礼を受けたのだろうか。私たちのためにイエスはそうなさったのである。この問いかけに関して、いくつかの主な理由を挙げることができる。

## 2. 神の戒めを行うため：

まず、イエスは洗礼を受けるに際し、洗礼者ヨハネに「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいこと」と仰った<sup>9</sup>。神が語るこの「正しいこと」(divine justice)は、申命記 6:25 において次のように見られる。「我々が命じられたとおりに、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に行うよう注意するならば、我々は報いを受ける」。神の戒めを実行すれば、報いを受けることになっているので、主イエスは洗礼者ヨハネに

<sup>5</sup> 同上 1267 項；エフェソの信徒への手紙 4:25。

<sup>6</sup> 『カトリック教会のカテキズム』1214 項。

<sup>7</sup> 「この大祭司はわたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」。ヘブライ人への手紙 4:15。

<sup>8</sup> 同上。

<sup>9</sup> マタイ 3:13-17 (特に 15 節)。

「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしい」と仰い、自ら進んで洗礼者ヨハネより洗礼を受けた。神の戒めを行い従うことは「正しいこと」だから<sup>10</sup>。

では、イエスは何故上述した申命記に示される神からの戒めを行い、従わなければならなかったのだろうか。ガラテヤの信徒への手紙の中でその理由が次のように挙げられている。「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした」<sup>11</sup>。父なる神がよいと思った時にご自分のひとり子を律法の支配下に遣わしたので、人間イエスは律法に従って生きなければならなかった。律法は人間に与えられたものだから。

### 3. 祭司になるため：

父なる神がイエスをこの世に遣わした目的は、イエスが罪を犯した人類の贖いのために自分をいけにえとして献げるためであった<sup>12</sup>。いけにえは祭司職を前提とするので、祭司職といけにえとは密接に関係しているのである<sup>13</sup>。

ユダヤ教による祭司職といけにえの方式を背景に、イエスの祭司職とイエスのいけにえの行為についてヘブライ人への手紙では、キリストが大祭司であると説明されている<sup>14</sup>。ユダヤ教による旧約の祭司の本来の役割は様々であった。つまり、それぞれの祭壇 (sanctuary) をはじめ、後にエルサレム神殿を母体とする祭壇を擁護し、管理し、ヤーウェの律法を民に教え、ヤーウェの御名によって民を祝福し<sup>15</sup>、神のみ旨を求め、神の御ことばを民の生き方に当てはめることなどであった<sup>16</sup>。だが、バビロニア

<sup>10</sup> シラ書 35:1-6 において神の律法を守り、従うことは礼拝やいけにえの行為とされる。J. A. Fitzmyer, *Romans* (New York: Doubleday, 1993), 639-640 を参照。

<sup>11</sup> ガラテヤの信徒への手紙 4:4-5。

<sup>12</sup> ローマの信徒への手紙 3:23-25。

<sup>13</sup> ヘブライ人への手紙 2:17。この節において、祭司であるキリストのアイデンティティーはキリストのいけにえの行動と関連づけられている。

<sup>14</sup> ユダヤ教の祭司職といけにえについて、Gerald O'Collins, SJ and Michael Keenan Jones, *Jesus Our Priest: A Christian Approach to the Priesthood of Christ* (New York: Oxford University Press, 2010), 1-8 を参照。

<sup>15</sup> 申命記 10:8。

<sup>16</sup> エレミア書 18:18; 民数記 10:10-11。

捕囚後、祭司の主な著しい役割はいけにえを献げる行為となった。いけにえも様々であった(例えば, communion sacrifices, sacrifices that were gifts, and sacrifices for sin)。祭司は礼拝を司り、いけにえを献げる役割を果たしていた。このような行為は、祭司職から生じる教え(teaching)や礼拝儀式(cultic activity)の役割に要約することができる。祭司職から生じるこのような異なる役割は、仲介の共通基盤であった。祭司による仲介は二方向(つまり、二通り)であった。すなわち、民への神の御ことばと律法の教えにおいて祭司は神を代表し、神へのいけにえや祈願において祭司は民を代表した。

君主制の滅亡と捕囚後に、より組織化された祭司職はユダヤ教の中心となり、祭司になるために祭司族の系図(priestly lineage)が不可欠となった。祭司はレビ族に由来し、アロンの独特の家系に遡る。アロン自身は祭司であり、王であり、預言者であった。捕囚後、初めて真に大祭司とされたのはヨシュアであるが、<sup>17</sup> 彼は神と民の仲介者の役割を果たしていた。何故ならば、彼は贖罪の日に神殿の至聖所に入り、贖罪のための儀式を取り行っていたからである。<sup>18</sup> 大祭司の注油<sup>19</sup>と着衣<sup>20</sup>は王的伝統として続いていた。非イスラエル人や非レビ族の人をヤーウエが祭司にし、彼らをイスラエル人やレビ族の祭司と共に神殿で祭司として仕えさせたという行為<sup>21</sup>は、祭司職の行使がアロンの子孫だけに限定されると示す民数記の規定に対する挑戦であった<sup>22</sup>。

レビ族の祭司職と大祭司であるキリストの祭司職の間には連続性(continuity)と不連続性(discontinuity)がある。連続性としては、いずれの祭司職も神による任命である。民に対して善を行う道具としてヤーウエはレビ族の人を祭司に選んだ。<sup>23</sup> 新約の大祭司として奉仕するようにイエスも神から任命を受けた。双方のケースにおいて、

<sup>17</sup> ハガイ書 1:1, 12, 14; 2:2, 4。

<sup>18</sup> レビ記 16。

<sup>19</sup> 出エジプト記 29:4-7; レビ記 8:6-12。

<sup>20</sup> 出エジプト記 28:1-29:9。

<sup>21</sup> イザヤ書 56:6-7; 66:18, 21。

<sup>22</sup> 民数記 4:1-29; 8:1-26; 18:1-23。

<sup>23</sup> 出エジプト記 25-30, 39-40; レビ記 8-9; 民数記 1-10。

民を(礼拝を通して)聖化し、民に神の教えを宣べ伝えることは神が祭司職を定めた目的であった。祭司には礼拝を司る役割と民に教える役割があった。礼拝の頂点に達する行為として、いけにえを捧げることが祭司としてレビ族(の人)とイエス自身の著しい役割であった。

不連続性として、キリストはアロンの家系に遡る祭司職に与っていない。メルキゼデクのような永遠の祭司になるために、人間による家系はキリストの祭司職の根拠ではなかった。レビ族の祭司は自分の罪と人々の罪のために繰り返していけにえを捧げていたことに対して、イエスは一回のみ人々の贖いのためにいけにえを献げた。これこそキリストの祭司職の主な性質(nature)である。

では、イエスは洗礼を受けるに先立って祭司だったのであろうか。イエスはレビ族に属する者でもなければ、ヘブライ人への手紙によると、イエスはそもそも祭司でもなかった。<sup>24</sup> イエスはむしろユダ族出身であった。<sup>25</sup> イエスの出身のユダ族に対してモーセは祭司について何も語っていない。このユダ族から祭壇に仕えた者は誰もいなかった。すなわち、ユダ族からは祭司が出ていないとするならば、いけにえを捧げるために、イエスはまず祭司でなければならなかったと考察することができるであろう。さらに、祭司になるためにイエスは律法に従って何かを行わなければならなかった。

出エジプト記は次のように祭司になる次第を物語る。「次に、アロンとその子らを臨在の幕屋の入り口に進ませ、彼らを水で清めなさい。アロンに祭服を着せ、彼に油を注いで聖別し、祭司としてわたしに仕えさせ」と。<sup>26</sup>

従って、イエスが神の律法を守りたいならば、結果的に彼は祭司にならなければならぬ。何故ならば、大祭司としてイエスはいけにえを献げなければならぬからである。祭司でないと、誰もいけにえを捧げる権限も資格もないので、イエスが神の律法を守る(つまり、洗礼を受ける)目的は祭司になるためであった。イエスの洗礼の際、聖

---

<sup>24</sup> ヘブライ人への手紙 7:11-28 (特に 11-14 節)。

<sup>25</sup> 同上 7:14。

<sup>26</sup> 出エジプト記 40:12-13。

霊がイエスの上に注がれ、イエスは油注がれた者になり、祭司になった。<sup>27</sup>

イエスの洗礼の次第を物語るマルコ福音書は、イエスが水の中から上がると霊が鳩のようにイエスに降ってきたことに言及している。<sup>28</sup> 古代イスラエルの宗教において、霊はオリーブ油に連想させていた。イスラエルの王や祭司の着任式(anointing)に油が用いられていた。預言者エリアは自分の後任としてエリシャを塗油するように言われた。<sup>29</sup> そのような塗油の行為は神が彼らを受け入れるという象徴的なしるしであった。「メシア」というイエスのキリスト論的な重要なタイトルは、「油注がれた者」という意味のヘブライ語のことばに由来する。初期教会にとってこれに関連する重要な書はイザヤ書 61:1 である。ルカ福音書の中では、イエスが自分のガリラヤでの奉仕活動(ministry)の初めに、イザヤ書によるこの節を次のように引用した。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。」<sup>30</sup> 従って、多くの人々が塗油と聖霊の現存の間にある因果関係を見出した。<sup>31</sup>

#### 4. 祭司職を満たす条件：

誕生の際、キリストがレビ族に由来する祭司職の下に属していないとすれば、キリストは新約の祭司として、しかも大祭司としての条件を満たしていたであろうか。ヘブライ人への手紙は大祭司のための三つの条件を挙げる。「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。」<sup>32</sup> 神の子であること(divinity)だけで、一つ目の条件(人間)は満たされないが、受肉によって神の子が人間になったことによってその条件が満たさ

<sup>27</sup> St. John Chrysostom, Cyprian, and Eusebius はイエスが受肉した時点から祭司であったと議論する。O'Collins, *Jesus Our Priest*, 83, 101 を参照。だが、先述べたように、改めて祭司になるためにイエスは洗礼を受けないだろう。

<sup>28</sup> マルコ 1:10。

<sup>29</sup> 列王記上 19:16。

<sup>30</sup> ルカ 4:18。

<sup>31</sup> Alister E. McGrath, *Theology: The Basics* (Wiley Blackwell, 2018), 123-124.

<sup>32</sup> ヘブライ人への手紙 5:1。

れた。<sup>33</sup> イエスは人としての成長、苦しみ、死を経験したことによって、大祭司として人間を代表した。<sup>34</sup> イエスは自分の榮譽のために祭司になったのではなく、神によって任命されたことによって二つ目の条件が満たされた。『あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ』と言われた方が、それをお与えになったのです。又、神は他の個所で、『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われています。<sup>35</sup> ユダヤ教の祭司は民の罪と自分の罪のためにいけにえを献げたが<sup>36</sup>、イエスは罪なき方だったので<sup>37</sup>、自分の罪のためではなく人々の罪のためにいけにえとして御自分を献げた<sup>38</sup>ことによって三つ目の条件が満たされた。

王であるメルキゼデクはアブラハムを祝福した祭司であり、「永遠の祭司」と呼ばれている。<sup>39</sup> ヘブライ人への手紙にとって、この不思議な人格のメルキゼデクは、レビ族の祭司職より優っており、それに先立つ例として与えられる。ヘブライ人への手紙の著者によると、メルキゼデクの祭司職はレビ族の祭司職より偉大で、それに先立つものであった。<sup>40</sup> 聖書は彼の祖先や誕生や死について語らないので、死んでしまったレビの血統の祭司たちと異なって、メルキゼデクは「永遠に祭司」<sup>41</sup> である。アブラハムがメルキゼデクより祝福を受けたと言うことは、メルキゼデクがアブラハムと彼の子孫より、そして祭司長のレビより優れた者であることを示している。これを背景に、ヘブライ人への手紙では、キリストは「永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われており、それはキリストがレビ族の大祭司より偉大な方であることを意味する。キリストを前表したメルキゼデクは「祭司」と呼ばれている一方、ヘブライ人への手紙では、キリストを繰り返して「大祭司」と呼んでいる。<sup>42</sup>

---

<sup>33</sup> 同上 1:1-4。

<sup>34</sup> 同上 5:7-9。

<sup>35</sup> 同上 5:5-6。

<sup>36</sup> 同上 5:2。

<sup>37</sup> 同上 4:15。

<sup>38</sup> 同上 7:27。

<sup>39</sup> 創世記 14:17-20；詩篇 110:4。

<sup>40</sup> ヘブライ人への手紙 7:1-28。

<sup>41</sup> 同上 7:3。

<sup>42</sup> 同上 3:1；4:14, 15；5:1, 5, 10；6:20；9:11。

## 5. 洗い清められるために：

イエスは洗礼を受けたいもう一つの理由は、イエスが祭司だけでなく、いけにえの供え物そのものでもあったことにある。イエスは世の罪を取り除く神の子羊だった。<sup>43</sup> レビ記 1:9, 13のいずれの節にせよ、神にいけにえを捧げる場合、供え物(つまり、子羊)の足と胴体を水で洗い清めなければならなかったと述べている。イエスはヨルダン川に入り、自分の手足と身を水に浸した行動を取った。それはイエスが汚れていたから洗い清められなければならなかったのではなく、彼自身が父なる神に献げられる供え物だったからにほかならない。従って、イエスは神の戒めに従わなければならなかった。つまり、イエスが父なる神に献げられる供えものだったので、洗い清められる必要があったのである。また、献げられる供え物もそれを献げる方もイエス御自身だったので、イエスが祭司になる必要があった。

## 結論：

キリストの受難と死、そして彼が栄光にあげられたことがキリストの決定的な祭司職を形づくったのである。だが、その祭司職はイエスの全生涯に及ぶものでもあった。すなわち、祭司的奉仕とされるイエスの公的生活を含む彼による教え、奇跡、癒し、従順、受難、死、いけにえなどである<sup>44</sup>。それに、キリストの祭司職はユニークな祭司職である。すなわち、キリストの祭司職は神の子であるイエスの祭司職という特質によって、一個人(individual)、単独(personal)、伝達不可能の属性(incommunicable)をもつ祭司職である。イエスは洗礼を受けた際、聖霊の力によって祭司職に与ったので、洗礼や司祭叙階を受ける者も聖霊の力によってキリストの唯一の祭司職に与ることができるのである。信徒はイエスの共通祭司職(common priesthood)に与り、司祭はイエスの奉仕祭司職(ministerial priesthood)に与るのである。<sup>45</sup>いずれもキリス

<sup>43</sup> ヨハネ 1:29。

<sup>44</sup> O'Collins, *Jesus Our Priest*; Kenan B. Osborn, *Priesthood: A History of Ordained Ministry in the Roman Catholic Church* (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 1989)を参照。

<sup>45</sup> キリストの唯一の祭司職への二通り参与について、第二パチカン公会議の『典礼憲章』と『教会憲章』を参照。



トの唯一の祭司職への参与である。